法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

Cranfordにおける語り手の働きについて

松村，豊子

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
73
(開始ページ / Start Page)
163
(終了ページ / End Page)
185
(発行年 / Year)
1990-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004547

Hosei University Repository

Cranford における語り手の働きについて

松　村　豊　子

1.　1851年の淑女たち

1851年に，その後20年余りにわたって女性問題をめぐる論争の都度引き合いに出された英国国勢調査が行なわれた。この結果，周知のように人口増加，特に女性人口の急増，男女の総人口の極端な不均衡により未婚女性と未亡人の総数が女性人口のおよそ半数にものぼること，また家庭から外へ出て働く女性の急増が，新に統計上の数字によって歴然たる事実として証明された。当然，"What are we to do with our spinsters?" という問題は産業革命後の急激な社会変動の影響と相俟って，英国19世紀中葉の社会問題を扱った文献に繰り返しみられるテーマの一つとなった。

未婚あるいは未亡人の女性の中でも特に身の処し方が難しかったのは，教養も能力も財産もほどほどにあった中産階級の女性たちであった。国民の大半が中産階級を自認する日本と違い，英国では階級差別が緩和した今日でもその比率は全体の40パーセントほどである。階級区別に現在よりもはるかにうるさかった当時，この比率は30パーセントに満たなかったと思われる。当時の女性の社会的地位がどうであったかというと，女権主張者をして女性の財産権，養育権，離婚権等に関する諸々の法的社会的改革運動に革命的と言える情熱をもって駆り立てたのが不思議でない程屈辱的であった。女性の社会的身分が未婚の間は父親のそれ，結婚後は夫のそれに準じたように，父親の存命中は一切の法的社会的権利は父親が握り，結婚するとそれは父親から夫の手に委ねられた。皮肉なことに，これらの権利を享受できたのは，成人した未婚の女性か未亡人だけであった。ただし，父親あるいは夫が悠々自適の生活ができるに足る財産を残してくれたかどうかは甚だ疑わしい。夫あるいは父親の保護のあるなしにかかわらず，常に食べるために働かなければならない労働者階級の女性は別にして，女性が金もうけのために働かないことが一つのステイタス・シンボルであった中産階級の女性たちは，一家の稼手である男性を失うと貧乏を余儀なく

Hosei University Repository

しいられた。貧困から彼女たちが身分を落さず働ける職種は非常に少なく，家庭教師，お針子，店の経営(特殊なものとして文筆家や芸術家が挙げられるが)と三つ四つに限られていた。しかも，その給金は金銭のために働かないのが淑女であるという身分上の規定が逆効果となり，応々にして安かった。中産階級の女性が乳母や農婦になることは社会的に考えられないことであったばかりでなく，読み書きから音楽美術裁縫に至る淑女の教養を一応身につけ，唯一の戸外活動が慈善（つまり，日曜学校で教えること，聖書及びそれに類する小冊子の配布，貧しい人々を訪問すること等）であれば[1]，彼女たち自身の感性及び道徳観もその職種を限定したのである。また，彼女たちが身分を落さずに結婚する場合にも，相手の男性の身分に厳しい制約があった。産業革命後，身分を規定する基準は根本的には土地所有の大小から職種と教育の有無に変わった。1850年頃には地主，牧師，軍人，法廷弁護士，事務弁護士が紳士職とみなされていた。さらに科学技術の著しい発展にともない，1860年代後半からは医者，建築技師，土木及び機械技師もその仲間入りをした[2]。したがって，1840年代50年代の中産階級の女性たちは、父親あるいは夫の死後，身分を落さずに生活できるだけの遺産がなければ，職探しも夫探しも困難を窮めたであろうことは，Samuel Butler の *The Way of All Flesh* (1903) 読むまでもなく容易に想像できる。

さて，総人口のおよそ4分の1を占める未婚の女性および未亡人をどうするかという問題の解決策については，保守派と進歩派がしばしば後世に残る喧々囂々の論争をくりひろげた。この典型的な例を一つ紹介しよう。1858年2月に *Blackwood's Edinburgh Magazine* の紙面で Margaret Oliphant は「生理学的に体の構造が異なる男性と女性に雇用の平等はありえない。ゆえに未婚の女性は移民者に対して結婚の制約がないオーストラリアへ渡り，すみやかに結婚相手を見つけるのが最善策である[3]」という主旨の保守的意見を表明した。これに反論して，翌3月には，前年1857年に設置された The Association for the Promotion of the Employment of Women と深いかかわりのある *The English Woman's Journal* で Lady Eastlake は「*Blackwood* の投稿者は女性のことを何もご存じない殿方のようで，当節財政上の必要性から働かなければならない女性の数は誇張されていると楽観的な見方をしていらっしゃる。彼によると，未婚の女性だけでなく男性も職探しに苦労しているのだから女性は結婚するのが一番いいということになる。しかし，女性に与えられ

Hosei University Repository

た雇用の機会は男性よりはるかに少ない。女性は今こそ新な仕事への道を切り開かなければならない[4]」と女性の自立を勧めている。Margaret Oliphant と Lady Eastlake は共に当時の代表的な知識人で，二人の対立するこのような意見は，今日から考えると，いささか陳腐だが，女性の生き方をめぐる当時の保守派と進歩派の考え方を象徴している。

ところで，この才女たち程知識もなく，能力もなく問題意識もなかった一般の女性がどのように自らの生き方を考えたかと言えば，小説のヒロインの生き方を見る限り，1880年代に入って必ずしも結婚を是としない「新しい女性」がヒロインとして登場するまで，ヒロインの多くが中産階級の女性であったせいか，最終的には必ずと言っていい程しかるべき紳士と結婚しているので，やはり，結婚志向が強かったのであろう。もっとも，1860年代になると，教育の普及に伴う読者層の拡大また女性に対する社会的認識の変化を反映して，ヒロインの身分や経験の性格は多様化するのだが[6]。そして，ヒロインや読者の結婚志向が強ければ強い程，未婚の女性は結婚できるだけの十分な女性的魅力がない人物として揶揄の的となった。未婚あるいは未亡人の女性数が多いという事実と裏腹に，フィクションで彼女たちがヒロインになることはまずなかった。男性作家の場合，ヒロインは概してヒーローの恋人あるいは花嫁として描かれ，他方，女性作家はしばしば作者自身の分身ともいえる理想的な女性をヒロインにした（例えば，Brontë 姉妹は情熱的な，また，George Eliot は倫理意識の高いヒロインを描いた）ので，男性を魅了できない，つまり結婚できないヒロインを描くことはできなかった。では何故 David Cecil に時代の拘束に甘んじる「鳩」，「二流作家[6]」と酷評された Elizabeth Gaskell は未亡人と未婚女性だけの社会を描いた *Cranford* を書くことができたのか。主な理由は彼女がこの特殊な社会を歴史的事実としてとらえていたからだ。

国勢調査が行なわれた1851年，Gaskell は明らかに統計上の数字，特に女性人口のしめる割合に無関心ではいられなかったようだ。同年２月から３回にわたり *The Ladies' Companion* に連載された短編小説 " Mr. Harrison's Confession " では，あるいなか町の中産階級における女性数と男性数の比率を５対１としている。年配の開業医は新来者である若い医者に次のようにこの状況を語っている。

" You will find it a curious statistical fact, but five-sixths of a

Hosei University Repository

certain rank in Duncombe are women. We have widows and old maids in rich abundance. In fact, my dear sir, I believe that you and I are almost the only genlemen in the place—Mr. Bullock, of course, excepted. By gentleman, I mean professional man."[7]

医者，事務弁護士といった専門職に就く男性を除けば，他はすべて女性で，未亡人と年老いた未婚女性の数は夥しい。また，同年12月に，当初は一回限りの読み切り物として *Household Words* に発表された短編小説 "Our Society at Cranford[8]" ——これが好評で，編集者 Dickens のたっての要望でその後断続的に翌52年1月から53年5月まで7回にわたって同誌に掲載され，53年6月に単行本 *Cranford* として刊行された——単行本では第1，2章にあたる箇所では，アマゾンに占領されたクランフォードという町が紹介されている。

In the first place, Cranford is in possession of the Amazons; all the holders of houses, above a certain rent, are women. If a married couple come to settle in the town, somehow the gentleman disappears; he is either fairly frightened to death by being the only man in Cranford evening parties, or he is accounted for by being with his regiment, his ship, or closely engaged in business all the week in the great neighbouring commercial town of Drumble, distant only twenty miles on a railroad. In short, whatever does become of the gentlemen, they are not at Cranford. What could they do if they were there? The surgeon has his round of thirty miles, and sleeps at Cranford; but every man cannot be a surgeon[9].

これは *Cranford* の有名な冒頭の一節で，クランフォードの地理的社会的状況が簡潔に表わされている。クランフォードは近くの大商業都市マンチェスターことドランブルから20マイル離れたいなか町で，生後まもなく母親を失ったGaskellが未婚の叔母たちに引きとられ，幼年時代を過ごしたナッツフォードがモデルになっている。ここのアマゾンたちは，働きに出なければならない程

Hosei University Repository

貧しくないが，乏しい資産でなんとか淑女の面目を保つ未亡人や未婚の女性で，皆50歳を過ぎている。彼女たちは自ら作った淑女の行動規範を固守し，善意にあふれているので，道徳上の指導者である牧師も，遺産訴訟等利害関係の事務的処理を行なう弁護士も，また，産業化からとり残されているため諸々の専門家である男性も必要でない。ただ医者ひとりを男性として必要とする女性だけの寂れた平和な町，これがクランフォードである。

全体の6分の5あるいはほぼ全員が未亡人と未婚女性であるというのは，一見すると，国勢調査による4分の1の数字をはるかに上回る非現実的な途方もない事のように思われる。しかし，当時の中産階級の女性がおかれた社会状況を顧みると，Gaskell が挙げる数字はかなり信憑性があるのではないだろうか。彼女はこうしたいなか町が実在したことを，*Granford* の動機づけとなった随筆 "The Last Generation in England"（1849年に米国の雑誌 *Sartain's Union Magazine* に掲載）や手紙の中で熱っぽく繰り返し弁明している。

> I have made no mention of gentlemen at these parties, because if ever there was an Amazonian town in England it was—. Eleven widows of respectability at one time kept house there: besides spinsters innumerable. The doctor preferred his arm-chair and slippers to the forms of society, such as I have described, and so did the attorney, who was besides not insensible to the charms of a hot supper[10].

> I thought people would say it was ridiculous, and yet, which really happened in Knutsford![11]

Mary Barton（1848）で時事的問題に関する正確な数字を挙げたように，Gaskell は *Cranford* でも正確な数字をあげ，これをある面で歴史的事実の表記にしている。ここでは男性人口と女性人口の途方もない不均衡が事実であるということが，一家の大黒柱である家長の世話や意向に煩わされず，一見気楽で勝手気儘な生活をおくっている淑女たちの隠された絶望感，恐怖心をまぎれもない作品の低い基調音にしている。彼女たちが心強いアマゾンであると自負すればする程，皮肉なことに彼女たちの無防備で頼りない実像が浮かびあが

Hosei University Repository

るのである。Gaskellが 挙げるこの数字が英国全般のいなか町にあてはまるとは思えないが，ある特定の町には中年女性だけの社会があったことを読者に信じ込ませるのに十分な作家としての技量を彼女は備えているのだ。

2. 語り手 Mary Smith の視点

Cranford は全編が一連の女性社会特有のゴシップから構成される中編小説である。と，こう言えば，閉鎖社会の偏狭な精神，陰湿な意地悪，中傷等心が滅入るような雰囲気を連想しがちだが，ここでは噂話は老婦人たちの見栄と本音，虚像と実像の落差の大きさをユーモラスに表わす題材にすぎない。服装，茶会，娯楽等のともすれば読むに耐えない低俗な代物となる題材を一世紀以上にわたって読み続けられるベストセラー小説にした Gaskell の手法は Dickens のそれと優劣つけがたい。*Pickwick Papers*(1836-7) から *David Copperfield* (1849—50) に至る Dickens の一連の大作の構成は，主人公が旅をし，異質な風俗習慣に接し，人々に出会い，様々な経験をするといういわゆるピカレスク小説の形式をとっている。これが自由気儘で幸福な雰囲気をかもし出す反面，構成上の一貫性に欠けること，また，主題のほり下げ方に難点があることはここで繰り返すまでもない。*Cranford* にしかるべき構造と呼べるものがない以上，Gaskell の名前を全国的に有名にした社会小説 *Mary Barton* とこの作品は，事実を重んじつつも明らかに質を異にする。作品の内容から推すと，*Cranford* はまさしく Gaskell 版ピカレスク小説である。

作中度々 *Pickwick Papers* が引き合いに出されるばかりか，クランフォードの老婦人たちが事あるごとに話し合う様子は，マナーの滑稽さ，飽きることのない好奇心，干渉癖，善意の賞賛等の点で *Pickwick Papers* のそれと非常に似ている。Gaskell は Dickens との類似を語り手 Mary Smith の口をとおして次のように率直に認めている。

> In my search after facts, I was often reminded of a Ladies' Committee that he [my father] had to preside over. He said he could not help thinking of a passage in Dickens, which spoke of a chorus in which every man took the tune he knew best, and sang it to his own satisfaction. So, at this charitable committee, every lady took the subject uppermost in her mind, and talked

Hosei University Repository

about it to her own great contentment, but not much to the advancement of the subject they had met to discuss. But even that committee could have been nothing to the Cranford ladies .....[12].

ここで引用された Dickens の一節は *Pickwick Papers* 第32章で，下宿代のとり立てをめぐる珍問答がくりひろげられている。勿論，淑女ばかりのクランフォードでは下宿代のとりたてといった商売事は話題にはならないが，彼女たちの話に論理の一貫性がなく，支離滅裂である点は Dickens のそれを凌いでいる。具体的な例を挙げる前に，主要人物を簡単に紹介すると，クランフォード社交界の中心人物は，牧師の娘である Jenkyns 姉妹，Deborah と Matilda で，彼女たちの茶飲友達に Miss Pole, Mrs Forrester, Mrs Jamieson といった人物がいる。語り手 Mary Smith は Jenkyns 家の客人である。ある時 Mary が目下行方不明の Jenkyns 姉妹の弟 Peter の消息を知ろうとして，Miss Pole と Mrs Forrester から情報を得ようとするが，全く要領を得ない返答だけが返ってくるのだ。

I asked Miss Pole what was the very last thing they had ever heard about him; and then she named the absurd report to which I have alluded, about his having been elected Great Lama of Thibet; and this was a signal for each lady to go off on her separate idea. Mrs. Forrester's start was made on the veiled prophet in Lalla Rookh—whether I thought he was meant for the Great Lama, though Peter was not so ugly, indeed rather handsome, if he had not been freckled. I was thankful to see her double upon Peter; but, in a moment, the delusive lady was off upon Rowlands' Kalydor, and the merits of cosmetics and his hair oils in general, and holding forth so fluently that I turned to listen to Miss Pole, who (through the Ilamas, the beasts of burden) had got to Peruvian bonds, and the share market, and her opinion of joint-stock banks in general, and of that one in particular in which Miss Matty's money was invested. In vain I

Hosei University Repository

put in 'When was it—in what year was it that you heard that Mr Peter was the Great Lama ?' They only joined issue to dispute whether Ilamas were carnivorous animals or not ; in which dispute they were not quite on fair grounds, as Mrs Forrester (after they had grown warm and cool again) acknowledged that she always confused carnivorous and graminivorous together, just as she did horizontal and perpendicular ; but then she apologized for it very prettily, by saying that in her day the only use people made of four-syllabled words was to teach how they should be spelt[13].

彼女たちは話の論点とは無関係に，一つの言葉が個人に与えるイメージを追い，各々勝手に自分だけの想像の世界へ入り込んでいる。この傾向はクランフォードのいずれの老婦人たちにもあてはまる。ゆえに Gaskell が一つ一つの話題を通して表現したのは彼女たちの主義主張や道徳観でなく，彼女たちの不合理な想像，情緒の世界であり，これこそがこの作品の真の価値だと言っても差し支えないだろう。彼女たちは旅こそしないが，外部世界から来るものに対しては，初めて旅行をする者と同じ好奇心をそそられ，珍奇な反応を示し，なんとか異質なものを同化するのだ。

作品の冒頭で彼女たちをアマゾンと呼ぶため，Gaskell はフェミニストの印象を与えかねないが，これは誤解である。もし彼女がフェミニストであれば，まずこの老婦人たちの内的不毛を指摘したと思われる。彼女と個人的に親しかった Florence Nightingale は *Cassandra* (1852年に書かれたが，内容があまりに辛辣な社会批難であるため，J. S. Mill らの助言をもとに，内容を大幅に削除し書き直した。1858年に *Suggestions for Thought to Searchers after Religious Truth* の一部として自費印刷されたが，この時は出版されず，ごく親しい友人にのみ配られた）で，父親あるいは夫の言いつけに従うことから食事の仕方，あいさつの仕方に至るまで実に細かい規則で縛られた淑女には，決して「情熱」「知性」「道徳的活動」は望めず，彼女は「治癒不可能な幼児性」あるいは「語ることができない不幸」に陥ると，淑女の行動規範を批難している[14]。確かに，クランフォードの老婦人たちは，Nightingale の指摘どおり，専門職につき自立できるだけの知識も知性も判断力も意志もなく，日常生活においてすら女中たちの手助けがなければ何もできない程無能である。しかも，

Hosei University Repository

よき家庭人となるように教育をうけたにもかかわらず，「情熱」とはならないが善意ある好意を捧げる対象（つまり父親や夫，また兄弟）さえ彼女たちにはいないのだ。Gaskell は彼女たちのこのような内的欠落を熟知しており，婉曲にその幼児性や絶望感を示唆している。しかし，決して露骨にあばきたてはしなかった。彼女は同時代の女性作家 Charlotte Brontë や George Eliot が女性の自己確立をテーマに選んだのとは対照的に，女性にかせられた不文律に背いてまで自己を主張する女性を肯定しなかった。個人的に彼女が女性の自立をどのように考えていたかは別にして[15]，作品の上では基本的には細かい約束事に拘束される女性の生活を同じ立場にある女性の目で描いた。したがって，応々にしてその欠点には寛大で，男性に保護され従う女性の魅力を描く際には筆がさえている。*Cranford* はこのような彼女の創作態度を如実に示す最たる例である。

ここで当然問題になるのが，淑女たちの無駄話と珍奇な行動を見聞きする語り手 Mary Smith の視点である。まず第一に留意すべきことは，彼女がクランフォードの住民ではないことである。彼女はこの寂れた古いいなか町とは正反対の町，新興都市マンチェスターの出身で，昔から親しい Jenkyns 家を生まれてからずっとほぼ年1回の割合で訪問している外来者である。Mary は Jenkyns 家に異変があるたびにクランフォードを訪れ，老婦人たちのやりとりを見聞し，しばらく滞在した後，再びマンチェスターへ戻っていく。この都市（とは言えマンチェスターは1851年の時点では公式に都市として認められていなかったのだが[16]）といなかの対比は，そこに住む人々の風俗習慣，物の見方，考え方，感じ方の違いを象徴している。当時マンチェスターは富の追求と進歩発展を象徴する町で，秩序の混乱は莫しく，淑女の行動規範が介入する余地はなかった。マンチェスターを舞台にした *Mary Barton* で，ヒロイン Mary はこれを役に立たない束縛としか考えず，“propriety”に準ずる淑女は“sorrowful”でしかないと言っている。また，彼女は容姿端麗であればしかるべき夫を見つけ，彼女自身が労働者階級から淑女の身分になれると思い込んでいる[17]。もっとも，当時の実業家，技術者の身分は曖昧で，彼らを位置づける社会的尺度は確立されていなかったのだが。他方，クランフォードでは18世紀的尺度に従い，貴族との縁故関係で身分が決められるため，Mary Smith の父親がクランフォードを離れ，マンチェスターの富裕な実業家になったことは，「貴族的社交界」からの「堕落」でしかない。クランフォードでは金もう

Hosei University Repository

け，商売にかかわることは見聞きしてはいけない俗事である。Mary Barton と名前が同じである Mary Smith は，前者同様マンチェスターの申し子らしく合理的な考え方をし，「感慨よりも事実[18]」を重んじ，見栄をはるだけの淑女の規範を一笑にふしている。ただし，Mary Smith は Mary Barton と異なり，淑女たちの生活に興味を抱き，彼女たちの善意あふれる心根そのものには深い共感をよせている。

次に問題になるのが，Gaskell が語り手としての Mary Smith にどの程度の信頼をよせているかである。作者の語り手に対する信頼度は第1回配本の第1，2章とそれ以降とでは明らかに変っている。第1章と第2章では，クランフォードの淑女たちの生活をいわば歴史的過去の事実として書いているため，「感情」より「事実」を優先する Mary は信頼できる報告者である。しかし，第3章以降，作者の興味は淑女の生活の単なる記録にとどまらず，彼女たちの隠された無意識の部分への追求にむけられるため，Mary の視点の信頼度は半減され，逆に情緒面で作者が感情移入するのは，第1，2章でほとんど顔を出さなかった Jenkyns 姉妹の妹 Matilda こと Miss Matty になる。そして，さらに Mary Smith の視点の信頼度が疑わしくなるのは，彼女自身の Miss Matty に対する共感がつのるにつれ，クランフォードの老婦人たちを客観的に観察する心理的距離が徐々に失われるためである。

Margaret Tarratt は *Cranford* についての卓越した小論文 "*Cranford* and 'the Strict Code of Gentility'" で，一貫した視点の欠如について次のように弁明している。

> By Mary Smith's association in [Cranford] she compels us to accept Cranford as a reality, but from her point of detached observation she insists also on its bizarre quality and in so doing highlights its unreality[19].

Tarratt によると，クランフォードの「現実」と「非現実」を描く視点の要は常に Mary Smith ということになる。しかし，彼女の視点に対する作者の信頼度はもう少し細かく定義する必要があるのではないだろうか。読者（Tarratt も含めてだが）が一連のゴシップをとおして作者が淑女たちの生活を肯定しているのか，否定しているのかが曖昧で，作品構成の一貫性のなさを痛感せざる

Hosei University Repository

をえない第一の要因は，やはり，作者の Mary Smith に対する信頼度の変化，言い換えれば，作者自身の Miss Matty に対する態度の変化に帰すべきであろう。

3. 語り手に対する作者の信頼度の変化

前にも述べたように，*Cranford* と "The Last Generation in England" との関連は深い。特に老婦人たちの日常生活を総括的に紹介した第1章は，"The Last Generation in England" の繰り返しと言っても過言でないだろう。いくつかの逸話が重複するだけでなく，"The Last Generation in England" で Gaskell がとった風俗史家の態度が基本的にはそのまま *Cranford* の語り手 Mary Smith のそれになっている。その態度とは「私自身が見たり，あるいは年老いた親類の者によって私に語り継がれたいなか町の生活の詳細のいくつかを記録する[20]」ことである。ゆえに，ここでは古い淑女のしきたりを忠実に守る Deborah Jenkyns に焦点があてられる。Dr. Johnson を擁護する Deborah と Dickens の熱烈な支持者である Captain Brown との文学論争は，戯画化されているものの，時代遅れになりつつある彼女の淑女規範を婉曲に，しかし時代の趨勢の中で正確に位置づけている。第2章が Deborah の老衰死で終わるのは当然のなりゆきと思われる。

第3章以降も Gaskell の風俗史家としての態度は依然変わらず，年代と風俗に関しては常に正確な数字を挙げつつ，入念な描写をしている。まず年代について言えば，*Cranford* は *Pickwick Papers* の第13号が配本になった1837年頃から始まり，1850年前後で終わる。第2章末尾で，Miss Jenkyns は *A Christmas Carol* (1843) 刊行後の1834年に亡くなり，この時52才の Miss Matty は最終章では58才になる。その間，第5章 "Old Letters" では，Jenkyns 姉妹の父母と祖父母の手紙が導入され，時代はナポレオン戦争期から1770年頃まで遡る。第6章と第11章ではそれぞれクランフォードを逃げ出した Peter Jenkyns と奇術師 Signor Brunoni こと Samuel Brown がナポレオン戦争に参加した事情が説明されている。Gaskell はこの時代の裏付けとして，手紙の文体や書式を変え，衣装や乗り物等の風俗の記述にも細心の注意を払っている。

また，風変わりな淑女たちの生活を現実化するため，彼女たちの年給が主観の介入を許さない数字で表わされている。父親亡き後の Jenkyns 姉妹の年収

Hosei University Repository

は162ポンド13シリング4ペンスで，軍人未亡人の Mrs Forrester の年収は100ポンドに満たない。他の老婦人たちの年収は明らかにされないが，おおよそこの前後と思われる。当時，一組の夫婦が紳士淑女の生活をするのに300ポンド，紳士ひとりならばその半分の150ポンドが最低必要であったというから[21]，彼女たちが品位を落さず生活するには，いかにクランフォードのモットーである“elegant economy”を心掛けなければならなかったか同情するにあり余る。パーティの時，夕食を出さない方が上品だとか，贅沢は下品だとか，帽子さえ新しければ，洋服がいかに時代遅れであろうとも盛装完備とみなすこと，訪問時間を決め，それ以外の時間は粗末な身なりでローソク1本に至るまで節約して過ごすこと，また，女中が1人しか雇えず，雑事を自ら手を汚してしなければならないにもかかわらず，人前では“woman of leisure”を装うこと。これらは彼女たちの経済状態を考えると，冗談事ではなく，切実な苦肉の策である。Mary の事実を究明する目は，これらの数字の背後に隠れた真相を明らかにするのだ。

では，この洞察力に富み，しかも，同情心を失わない Mary Smith の視点が不明瞭になるのはいつか。作者が一般的な事柄からきわめて個人的なことに興味をうつした時，Mary の合理的な視点には自ら限界が生じる。彼女の情緒的限界が最初に示唆されるのは，第3章で Miss Matty の昔の恋物語を Miss Pole から聞かされた時である。若い頃の恋人との再開，そしてその死に出会った Miss Matty の心の動きは，Mary によって直接語られることはない。Miss Matty と Mr Holbrook は若い頃恋仲だったが，牧師の娘は自作農（ヨーマン）と結婚して身分を落してはいけないと父親と姉 Deborah に反対され，二人は結婚をあきらめた。このいきさつを聞いた Mary はきわめて無邪気な子供っぽい質問をする。

> “And how came Miss Matilda not to marry him?” asked I.
>
> “Oh, I don't know. She was willing enough, I think; but you know cousin Thomas would not have been enough of a gentleman for the rector and Miss Jenkyns.”
>
> “Well! but they were not to marry him,” said I impatiently[22]

伝統的なしきたりに無頓着な Mary は，Mr Holbrook の死後未亡人用の帽

Hosei University Repository

子を着用する程，30年以上も昔の恋心を未だに失わない Miss Matty の屈折した心理状態は理解できない。Mary はこのことに関して Miss Matty の心の部屋のドアをあけることはない。

ところで，Mary は Miss Matty の心を把握しきれないが，彼女の従順で純粋な心に無条件で感動したのは作者 Gaskell 自身であった。第3章以降，事実上のヒロインは Miss Matty になり，理屈で解明できない事柄に関する限り，例えば，泥棒事件とか男爵未亡人 Lady Glenmire と町医者 Mr Hoggins との再婚に対しては，Mary の理性的な判断を示すコメントは控えられ，代わりに Miss Matty の情緒的反応が作者の信頼を得る。そして，Mary は善良だが，決して理性的とは言えない Miss Matty と意見を異にする人物たちの虚栄心や弱味を手厳しく指摘する役割を担う。泥棒事件では，Mis Matty の男性への依頼心を詰り，表向き男性無用論を唱える Miss Pole は，秘かに男性用の靴を玄関に置く弱気が暴露され，その昔牧師に心をよせ，色よい返事がもらえなかったことまで付け加えられている。また，Lady Glenmire の再婚に反する彼女の義妹 Mrs Jamieson は身分の序列の固守を唱える反面，彼女自身が傲慢な執事の支配下に置かれていることが指摘される。

語り手 Mary Smith はクランフォードの生活を客観的にとらえる者として，当初は公明正大であるためにその性格はおろか氏素姓さえ明らかにされなかった。しかし，作者の Miss Matty への肩入が大きくなるにつれ，Mary は自ら絶対的な語り手，「全知全能」の語り手の立場を放棄している。第12章で突然彼女は自己告発をする。

> In my own house, whenever people had nothing elso to do, they blamed me for want of discretion. Indiscretion was my bugbear[23].

淑女のしきたりを破る Miss Matty に，それに無頓着な Mary が共感するのは納得がいくにしても，Mary がこのように唐突に自らの欠点を告白するのは何故か。これに続く第14章では，数字に強く，女中に躾をする際にみられたように事務の才にもたけていたはずの Mary は，Miss Matty が株主をしていた銀行が倒産し，財産の大半を失うと，彼女の財政をどのように立て直すかマンチェスターの実業家である父親と話し合うが，彼の理論が Miss Matty 同

Hosei University Repository

様に理解できないとまで言っている。

> Miss Matty and I sat assenting to accounts, and schemes, and reports, and documents, of which I do not believe we either of us understood a word; for my father was clear-headed and decisive, and a capital man of business, and if we made the slightest inquiry, or expressed the slightest want of comprehension, he had a sharp way of saying, 'Eh? eh? it's as clear as daylight. What's your objection?' And we had not comprehended anything of what he had proposed, we found it rather difficult to shape our objections; in fact, we never were sure if we had any[24].

こういったくだりを読むと，Mary は故意に絶対的な語り手の鎧を脱ぎすてようとしているように思える。語り手から登場人物のひとりになることで，Mary は財産を失い，女中夫婦の家に下宿するはめになった Miss Matty を慰めようと，行方不明の彼女の弟 Peter を探し出し，ひとりで呼び戻す手はずを整えるのだ。Peter 帰国後の大団円では，身分違いの結婚も，成り上がり者も，クランフォードの住民ではない Mary も含めて，すべての者が Miss Matty を中心にしたクランフォードの社交界に円満に受け入れられる。

> Ever since that day there has been the old friendly sociability in Cranford society; which I am thankful for, because of my dear Miss Matty's love of peace and kindness. We all love Miss Matty, and I somehow think we are all of us better when she is near us[25].

Mary Smith の現実的な合理的視点で始まったこの作品は，最終的にはこのように Mary の Miss Matty の感情の世界への同化で終わっている。彼女たちが情緒的な面で一体化するゆえに，Mary は理性的判断力の麻痺を "better" な状態とみなすことができるのだ。

しかし，Mary の一貫した現実的視点が明確でないからと言って，本作品の

Hosei University Repository

醍醐味である淑女たちの虚像と実像とのずれから起こる笑いに何ら損障はない。否，むしろ語り手と作者の賞賛をえた Miss Matty の存在こそが作品の新鮮な笑いの源と思われる。10年後の1863年に *Cranford* の続編として書かれた "The Cage at Cranford" では，Mary の視点が途中から曖昧になることはないが，活気のある笑いは消え，老婦人たちの無知無能ぶりが興ざめする程あからさまに描かれている[26]。

4. Miss Matty と感情崇拝

今日 *Cranford* をある種の夢物語として解釈する批評家は少なくない。例えば，Coral Lansbury は語り手の視点云々よりも，作品全体から受ける印象をもとに，クランフォードを貧しい老婦人たちが互いに協力して幸福に暮らす「老女たちのユートピア[27]」と呼んでいる。また，Miss Matty だけでなく，Mary Smith の視点をも考慮した Martin Dodsworth は，「Gaskell の男性に対する無意識の敵意と，圧倒的男性社会ではこれが全く的はずれであるという認識との相剋を表わす，ある種の小ぎれいに整理された夢である[28]」と言っている。Lansbury と Dodsworth は共に構造上の一貫性がない本作品に，敢えて統一したテーマを見つけようとして，上記のような結論に達した。各論ともに漸新な視点からの解釈論を展開し，興味深いのだが，夢物語の中心にいる Miss Matty の位置づけが的確でないため，片手落ちの感を免れない。

Lansbury はクランフォードを「独自の規律と排他性による自律した社会」とみなすため，秩序の崩壊をうながす Miss Matty よりはむしろ秩序維持の象徴である Deborah Jenkyns を「守護神」とみている[29]。彼によると，Miss Matty は姉の強い呪縛から逃れられない無能な淑女たちのひとりにすぎない。しかし，はたして Miss Matty は単なる脇役だろうか。前章で論じたように，絶対的立場にいるべき語り手の平衡感覚をも狂わせる Miss Matty こそが作者の感情崇拝に裏付けされた真のヒロインであり，Deborah が活躍する第1，2章はその後の章の前奏曲のようなものである。一方，Dodsworth は Miss Matty が第3章以降のヒロインであると言いつつ，彼女を19世紀ヴィクトリア朝社会のいわゆる淑女教育が生んだヒロインではなく，David Cecil の言葉をかり18世紀のそれと定義している。

Miss Matty is, like the rest of her friends, as Lord David

Hosei University Repository

Cecil has observed, 'the childlike, saintly found in Stern or Goldsmith[30].

Miss Matty は確かに「子供のようで，天使のように穢がない。」しかし，彼女は18世紀的ヒロインというよりは，諸々の社会事情を考慮に入れると，*Cranford* よりおよそ二年前にやはり *Household Words* に連載された Dickens の *David Copperfield* に登場する Mr Micawber に近い（もっとも Mr Micawber 自身18世紀小説のユーモアのパターンから完全に自由というわけではないのだが)。

Mr Micawber は質素勤勉をモットーに「熱心に」「仕事をする[31]」という当時の中産階級の男性にかせられた不文律からほど遠い，俗に言う「落ちこぼれ」である。Dickens の感情崇拝を象徴する極付と言われる Mr Micawber は，無責任だが，しぐさの滑稽さと善意には理屈ぬきで拍手喝采をせずにはいられない。そして，Mr Micawber について言えることは，そのまま Miss Matty にあてはまるのだ。淑女の規範から見ると，クランフォードの老婦人たちの中で及第点をとれるのは，父親の仕事の補佐をする娘の役を実生活で演じた Deborah だけで[32]，他の婦人たちは彼女の大義名分が理解できない落第生である。Miss Matty にいたっては，人の善意を信じるあまり，口では姉 Deborah の貴婦人然とした態度を誉め称えながら，実際には姉が築いた秩序を率先して弛緩させる。当時の淑女教育と Miss Matty との関係をみると，彼女の善意と無垢が何に由来するか明確になるのである。

19世紀ヴィクトリア朝の淑女教育の本質的目的が女性を「無垢」の状態におくこと，特に性に関しては無垢というより無知にしておくことであったことは周知の事である。クランフォードの淑女たちに労働者階級の女性，例えば Miss Matty に仕える女中の Martha やインドの熱帯林の中を子供を連れ抜け出した Signora Brunoni の生活力，実践的知恵と行動力がないのは当然のことである。姉の Deborah が淑女の規範の化身であれば，Miss Matty はこれの動機づけが理解できないまま，唯無数の約束事に拘束され，自由を奪われた犠牲者の典型である。まず，性的抑圧について述べると，Miss Matty の場合，回復不可能な程その病状は悪化している。「男性の腕が女性の腰に回されること[33]」「キスの音[34]」は，「両眼がとび出しそうになる恐怖心[35]」をかきたて，また，男性の訪問客をもてなす際には食卓にワインを出すかどうか，男性用の

Hosei University Repository

洗面用具を用意したものかどうかさえひとりでは決められない。食事のとり方にも極度に神経質で，人前でフォークでグリーンピースを食べることや[36]，オレンジの甘美な汁を吸うこともできない[32]。つまり，淑女の慎しみという概念にこだわるあまり，他人特に男性に対して異様に自然さを失うのだ。また性的抑圧と同様に淑女教育の欠陥として指摘されているのが知的貧困である。Mary Smith は Miss Matty が破産した時，彼女が身分を落さず働ける仕事として定石どおり家庭教師を考えるが，知識技芸の点で失格し，「読み書き算数」といった初歩的な学力さえ満足にないと結論を下す[38]。“astronomy”と“astrology”の区別はおろか[39]，当時毎晩家族に聖書を読み聞かせるのが淑女の義務の一つであったにもかかわらず，彼女は聖書の長い単語や名前さえまともに発音できない。しきたりが話題になる都度彼女は自分の意見が主張できず，必ず「頭がいい」姉を引き合いに出すが，これは彼女の筆舌に尽し難い劣等感のせいであろう。

このように Miss Matty は知識もなく金もなく，男女関係の何たるかもわからない無い無い尽しの人間である。彼女に限らず他の老婦人たちも程度の差こそあるものの，これの例外ではない。「幼い頃から自由を奪われ，他人に頼りすがるように育てられた女性は，応々にして道徳的に無責任になり，彼女が権力を固守する領域は他人の生活への干渉，衣装，容貌の自慢ということになる[40]」と，Peter T. Cominos は淑女を皮肉っている。クランフォードの老婦人たちのゴシップ好きは，権力志向というより生き涯といった方が適切なのだが，無い無い尽しの彼女たちの権力志向の表われと考えられないわけではない。彼女たちの変化に乏しい退屈きわまりない日常生活は，一端洋服や帽子を新調するとか，他人の生活に首をつっ込むとなると，様子は一変し，実に生き生きとする。しかし，この干渉癖は無い無い尽しの代償として彼女たちが長い間培ってきた「無垢」と「良心的行為」のおかげで，決して不愉快ではない。彼女たちの良心的行為が端的に表われるのは，Miss Matty が破産した時で，彼女たちは仲間うちで彼女に内密でお金を出し合い，何とか彼女が身分を落さずに生活できるように万事とりはかるのだ。この行為は合理的な Mary Smith を泣き出させる程感激させ，彼女の父親をも感動で涙をぬぐわせる[41]。商品を売る際，客にその害悪を説き，買わないように勧める Miss Matty が良心的行為の鏡であることは繰り返す必要がないであろう。また彼女たちの無垢について言えば，これはいかにも無知と紙一重の無垢であるが，彼女たちの心は若

Hosei University Repository

く，好奇心で一杯である。華族様を歓迎するために，その呼び名を検討し，所かまわずありったけのブローチを身につけ歓迎の意を表明したり[42]，奇術師の一行が来たといって，前々日からこっそり楽屋裏をのぞきに行き，夜は奇術の謎解明に夢中になり，当日は興奮して落ち着かず開演の1時間半前に身じたくを終え，公演中はキリスト教が禁止する魔術を見てもよいかどうかと不安になり牧師の顔色をうかがう[43]。また容易に幽霊の存在を信じ，わずか200メートル足らずの暗闇小路を殉教師のように決死の覚悟で走りぬけたりするのだ[44]。ここでは，このような捧腹絶倒の場面は数えきれない程多い。

ところで，このような「無垢」「良心的行為」と言えば聞こえがいいが，子供っぽい行為を分別盛りの中年女性に誰が期待するだろうか。4人の娘の母親である Gaskell が，感情崇拝の対象として子供を選ばなかったのは，育児の煩らわしさや子供の破壊的な活力を知る者には納得がいくが，彼女は読者側の意表をつき，その対象を60才近い老婦人に選んだのだ。淑女教育の根本的目的が無垢の保持であることを考えれば，別段驚くことはないのだが，この意外性はたまらない魅力である。Gaskell は彼女たち，特に Miss Matty の情緒面での反応の正しさを主張し，語り手 Mary Smith をしてこれを疑う者の態度を否定した。しかし，彼女たちの無垢崇拝を守るためにはこれだけでは満足せず，Gaskell は意図的に Miss Matty の若さ，彼女が時間と経験の破壊的影響を受けないことを強調するように工夫している。語り手は Miss Matty のリューマチ，Miss Pole の義歯，Mrs Jamieson の居ねむりを老衰の兆候として指摘するが，これらは自分たちが淑女教育の犠牲者であるという意識が全くないのと同様，彼女たちをふけこませることはない。死の恐怖などさらさらない。彼女たちの心理的時間は若い時のまま停止しているのだ。

このことをはっきり言葉で裏付けるのは，30余年ぶりに Mr Holbrook と弟Peter にそれぞれ再会した時の Miss Matty の反応である。偶然生地屋でかつての恋人に再会した Miss Matty は18，9才の娘よろしく当惑のあまり言葉が出ず，帰宅すると自室に閉じこもってしまう[45]。また，再会した Miss Matty と Peter は次のような会話をかわす。

> 'I suppose hot climates age people very quickly,' said she, almost to herself. 'When you left Cranford you had not a grey hair in your head.'

Hosei University Repository

'But how many years ago is that?' said Mr Peter, smiling.

'Ah! true! yes! I suppose you and I are getting old. But still I did not think we were so very old! But white hair is very becoming to you, Peter,' she continued—a little afraid lest she had hurt him by revealing how his appearance had impressed her.

'I suppose I forgot dates too, Matty, for what do you think I have brought for you from India? I have an Indian muslin gown and a pearl necklace for you in my chest at Portsmouth.' He smiled as if amused at the idea of the incongruity of his presents with the appearance of his sister; but this did not strike her all at once, while the elegance of the articles did[46].

彼女には彼が何故白髪頭になったのか理解できず，また彼が買って来たという豪華な装飾品に小娘のように心を奪われるが，それらが年老いた自分には皆目似合わないことはわからない。クランフォードの老婦人たちに時間の概念がないことが裏付されなければ，Peter の帰国後，彼女たちが彼の花嫁に仲間うちの誰かがなるのではないかと内心やきもきする様子は，若者の恋の何ともグロテクスなパロディとなったと思われる。

5. まとめ

Cranford は老婦人たちの「良心的行為」と「無垢」を謳歌することで終わっている。勿論，途中から作者の全面的信頼を失い，作者の感情崇拝を表わす Miss Matty の補佐役をかねることにはなるが，語り手 Mary Smith の現実的な，風俗史に関心が高い視点がなければ，彼女たちのいささか現実離れした世界は「治癒不可能な幼児性」の象徴になったことは明白である。結局，この作品の魅力は事実を重んじる合理的な世界と，時間や経験の概念に一切無頓着な無垢の世界との絶妙な均衡にあると思われる。老婦人たちにその無能と無知の直接の被害者となる夫がいないことは，ともすれば崩れがちになるこの均衡を保持する大きな要因であろう。無垢崇拝の当時の旗頭である Dickens でさえ，*David Copperfield* では主人公 David をして幼な妻 Dora の主婦としての無能ぶりに愛想づかしをさせている。また，Gaskell がほぼ無条件で彼女

Hosei University Repository

たちの無垢を賞賛できたのは，合理的功利主義の一種の緩和剤として時代そのものが感情崇拝を必要としたからである。Miss Matty の善意と無垢に涙したのは，Mary だけでなく，当時の過度に感傷的な一般読者だったのだ。それゆえ，*Cranford* より10年後に Samuel Smiles の *Self-Help* (1863) が刊行され，ベスト・セラーになると，時期を同じくして書かれた "The Cage at Cranford" では，Gaskell はもはや Miss Matty の無知無能を賞賛すべき無垢としてとらえることはできないのだ。Gaskell 自身の長編小説を含めて，当時の大半の小説では戯画化された端役しか与えられない未婚の老婦人や未亡人たちの世界も，産業化からとり残されたいなか町の中産階級の家庭生活を事実に忠実に書こうとすれば，興味深い題材になることをこの作品は立証している。

Gaskell は *Cranford* のほかにも，いなか町の生活を事実にそくして記述したと思われる短編及び中編小説をいくつか書き残している。そこでもしばしば未婚の老婦人や未亡人がヒロインだが，彼女たちを感情崇拝の対象にしたのはこの作品だけで，彼女たちの生活は概して進歩発展からとり残されたいなか町が衰退する過程を象徴するように書かれている。Gaskell に常に心の安らぎをもたらしたと言われるナッツフォードの老婦人たちの世界は，1度しか再現することができなかった彼女の夢の世界だったのだ。

註

1) Maurice J. Quinlan, *Victorian Prelude* (London: Frank Cass & Co. LTD, 1965), Chap. 6 The Model Female, p. 155.
2) G. Kitson Clark, *The Making of Victorian England* (1962; rpt. London: Methuen, 1966), pp. 258-63.
3) Margaret Oliphant, "The Condition of Women" *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 1858 Feb. Vol. 83, No. dviii, p. 145.

Equality is the mightiest of humbugs—there is no such thing in existence; and the idea of opening the professions and occupations and governments of men to women, seems to us the vainest as well as the vulgarest of chimeras. God has ordained visibly, by all the arrangements of nature and of providence, one sphere and kind of work for a man and another for a woman.… How then about our unmarried sisters, our unmarried daughters, that alarming independent army which a bold calculator affirms to amount to "one-half" of the women of these kingdoms?… On the whole, one would suppose that the best expedient for such an emergency was, after all, Australia, where there is no Act of Parliament to compel emigrant ladies

Hosei University Repository

to marry within three days of their landing, and where at least there is room and scope for the energy which over-civilisation cramps and keeps in bondage.

4) Lady Eastlake, "The Profession of the Teacher" *The English Woman's Journal,* 1858 Mar. Vol. 1 No. 1, pp. 12–3.

The writer believes that the cry about unemployed women nowadays is marked by much morbid exaggeration, and that young men struggle with equal difficulties as tutors, as clerks, as emigrants; and that it would be an excellent thing if all single women would get married as fast as they can, and the rest hold their tongues in a dignified manner.…But, supposing women to have as *good* chances of escaping destitution as men (which they have *not*), still everybody knows that destitution is for them a more awful thing that there are depths of horror, of degradation, into which men cannot fall; and that, without any ugly reflections as to the comparative chances of the university tutor or the governess, there is cogent reason why prosperous Englishwomen, and those many good men who are willing to help them, should try with might and main to help their own sex to further industrial gains, and every reason why the young working women of the day should cast about for what their hand findeth to do, remembering that, after all, it is themselves who must clear the path to new occupations.

5) cf. Patricia Thomson, *The Victorian Heroine* (1956; rpt. London: Methuen, 1966).
6) David Cecil, *The Early Victorian Novelists* (Chicago: Chicago Univ. Press, 1935), Chap. 6 Mrs. Gaskell, p. 184.
7) Gaskell, "Mr. Harrison's Confessions" *The Works of Mrs. Gaskell* (1906; rpt. New York: AMS Press, 1972), Vol. 5, pp. 413–4.
8) Gaskell, *The Letters of Mrs Gaskell,* eds. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester Univ. Press, 1966), p. 748. A Letter to John Ruskin [? Late Feb. 1865]

The beginning of 'Cranford' was *one* paper in 'Household Words'; and I never meant to write more, so killed Capt Brown very against my will.

9) Gaskell, "Cranford" *Cranford and Cousin Phillis* (London: Penguin Books, 1988), p. 39.
10) Gaskell, "The Last Generation in England" *Cranford and Cousin*

Hosei University Repository

Phillis, p. 322.

11) Gaskell, *The Letters of Mrs Gaskell*, p. 748.

12) Gaskell, "Cranford," Chap. 12, p. 163.

13) *Ibid.*, pp. 163-4.

14) Florence Nightingale, "Cassandra" *The Cause*, Ray Strachey (1928; rpt. London: Virago Press, 1970), Appendix I, p. 361.

15) 後年 Gaskell が家庭の義務を耐えられない束縛と感じていたことは明らかで，夫に相談せず，彼女自身の意志と貯蓄で家を購入したりしている。また，最後の未完の作品 *Wives and Daughters* (1866) では Cynthia という淑女の行動規範を打破する女性を生き生きと描いている。

A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: John Lehmann, 1952).

16) Asa Brigg, *Victorian Cities* (1963; rpt. London: Penguin Books, 1987), p. 111. マンチェスターが公式に都市として認められたのは1853年である。

17) Gaskell, *Mary Barton* (London: Penguin Books, 1975), pp. 61-2.

18) Gaskell, "Cranford," p. 90.

19) Margaret Tarratt, "*Cranford* and the Strict Code of Gentility" *Essays in Criticism*, Vol. 18, 1968, p. 154.

20) Gaskell. "The Last Generation in England," p. 319.

21) Erna O. Hellerstein, Leslie P. Hume and Karen M. Offen eds. *Victorian Women* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1981), 63. Household Management for Ladies, p. 299.

22) Gaskell, "Cranford," Chap. 3, p. 69.

23) *Ibid.*, Chap. 12, p. 163.

24) *Ibid.*, Chap. 14, p. 195.

25) *Ibid.*, Chap. 16, p. 218.

26) Gaskell, "The Cage at Cranford" *Cranford and Cousin Phillis*, Appendix B, pp. 327-38.

27) Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: the Novel of Social Grisis* (London: Paul Elek, 1975), Chap. 4 "Cranford: Old Age and Utopia".

28) Martin Dodsworth, "Women Without Men at Cranford" *Essays in Criticism*, Vol. 13, 1963, p. 138.

29) Lansbury, *op. cit.*, p. 86.

30) Dodsworth, *op. cit.*, p. 132.

31) Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind 1830-1870* (1957; rpt. New Haven: Yale Univ. Press, 1875), Chap. 8 Earnestness.

32) Gaskell, "Granford," Chap. 2, p. 62.

33) *Ibid.*, p. 61.

34) *Ibid.*, Chap. 6, p. 104.

35) *Ibid.*

36) *Ibid.*, Chap. 4, pp. 74-5.

37) *Ibid.*, Chap. 3, p. 66.

38) *Ibid.*, Chap. 14, pp. 185-6.

Hosei University Repository

39) *Ibid.*, Chap. 8, p. 126.
40) Peter T. Cominos, "Innocent Femina Sensualis in Unconscious Conflict" *Suffer and Be Still*, ed. Martha Vicinus (Bloomington: Indiana Univ. Press, 1972), Chap. 9.
41) Gaskell, "Cranford," Chap. 14.
42) *Ibid.*, Chap. 8.
43) *Ibid.*, Chap. 9.
44) *Ibid.*, Chap. 10.
45) *Ibid.*, Chap. 8.
46) *Ibid.*, Chap., 15, pp. 207-8.